

# 大正期における女性と内職

## —奨励した立場と従事した立場から—

米田 南美

### 序章

現代では、大正期における女性の労働に関して、職業婦人という存在が脚光を浴びることが多い。しかし同時期に、内職に従事していた女性たちが存在したことを忘れてはならない。本稿の目的は、大正期において内職を奨励していた立場と、実際に内職に従事していた立場のそれぞれから、内職の実態を明らかにすることである。本稿では、実際に内職に従事していた立場として、新中間層の婦人に焦点を当てる。

日本では明治末期から大正期にかけて、新中間層という新たな社会階層が登場した。寺出によると、新中間層には、頭脳労働という労働形態、俸給という所得形態、社会階級上の位置では資本家と賃労働者の中間である、生活水準の位置では中位であるという4点の基本的性格があるという<sup>1)</sup>。先行研究では、新中間層に属する俸給生活者世帯の中には、世帯主の収入だけで家計を賅い切れていない世帯が全国に多く存在していたということが明らかになっている<sup>2)</sup>。またこのような世帯に対し、世帯収入の増加を図るために内職が奨励されていたことから、内職に携わった人々がかなり見られたのではないかと推察されている<sup>3)</sup>。このような新中間層の経済的背景を踏まえたうえで、永藤は、明治時代に発行された書籍から、明治後期以降に事務職や専門的職業と並び、家事の合間にできる内職が女子の職業のひとつとして位置づけられるようになったことを明らかにした<sup>4)</sup>。

このように先行研究によって、新中間層の家庭で内職に携わっていた人々がかなり見られると推察されているということと、内職が婦人の職業として位置づけられるようになったことが明らかにされていることから、大正期に新中間層の婦人が内職に従事していたということが考えられる。そのため本稿では、実際に内職に従事していた立場として、新中間層の婦人に焦点を当てる。

本稿では、内職の実態を明らかにするための資料として、大正期に発行された内職奨励に関する書籍のほか、婦人雑誌を用いる。学校教育の普及によって活字メディアを読みこなすことのできるリテラシーを持つ女性たちが増大したことを背景として、明治末

期から大正期にかけて、多数の婦人雑誌が誕生した<sup>5)</sup>。こうして誕生した婦人雑誌は、女性にとってほとんど唯一の社会とのコミュニケーションの場であり、情報源でもあったとされている。<sup>6)</sup>また、その読者層の中心は新中間層であったという<sup>7)</sup>。

本稿では、大正期に発行されていた婦人雑誌の中でも、『婦人之友』（1908年創刊）、『主婦之友』（1917年創刊）、『婦人倶楽部』（1920年創刊）を資料として用いる。『主婦之友』『婦人倶楽部』は、実用主義、わかりやすさを心掛けた路線と言われる「実用派」を代表する雑誌であり<sup>8)</sup>、また『主婦之友』や『婦人倶楽部』ほど発行部数は多くなかったものの、『婦人之友』も家庭生活に焦点を当て、主婦の立場に立った実用的な内容を目指していた雑誌であった<sup>9)</sup>。内職というテーマにおいて、生活に実用的な内容を掲載していたこれらの婦人雑誌を資料として用いることは相応しいと考える。また、上述したように、内職に従事していた立場として新中間層の婦人が考えられるため、彼女たちを主な読者層としている婦人雑誌には、内職関連の記事が見られると予想できる。実際に『婦人之友』、『主婦之友』、『婦人倶楽部』には内職を奨励する記事や、読者投稿による内職経験談が載せられている。そのため、内職の実態を明らかにするうえで、婦人雑誌は有効な資料であると言える。

第1章では、大正期に発行された内職奨励に関する書籍や婦人雑誌における内職を奨励する記事から、内職が奨励された背景および奨励された内職の具体的な内容を明らかにする。

第2章では、『主婦之友』『婦人倶楽部』『婦人之友』といった婦人雑誌のなかでも、読者投稿による内職経験談の記事に着目し、実際に内職を行っていた立場から、内職に従事するようになった目的や、行っていた内職の具体的な内容について明らかにする。また、内職をすることで、婦人の意識に変化はあったのかというような、内職が婦人に与えた影響や、妻の内職従事に対する夫の姿勢についても考察する。本稿で取り上げる婦人雑誌である、『婦人之友』『主婦之友』『婦人倶楽部』はいずれも新中間層が主な読者層ではあったものの、『婦人之友』は高級官僚や高級サラリーマン、大学教授などの新中間層上層が主な読者層であったと言われている<sup>10)</sup>ことから、新中間層の中でも婦人雑誌によって読者層が異なっていたことがわかる。そのため第2章では、読者層の異なる婦人雑誌によって、どのような相違点があるのか、あるいは読者層の異なる婦人雑誌でも共通点が見られるのかという点にも着目し、考察を行う。

## 第1章 大正期に奨励された内職

### 第1節 内職が奨励された背景

大正期には、内職を奨励する書籍や記事がいくつも発行されていた。本節では、大正

期に発行された内職奨励に関する書籍や婦人雑誌の記事から大正期になぜ内職が奨励されたのか、その背景を明らかにする。

### 生活難解消のための内職

大正期の生活難には、第一次世界大戦の影響による物価騰貴が大きく関係していることがうかがえる記述が複数の書籍や記事で共通して見られる。

1917年、女性教育者の嘉悦孝子<sup>11)</sup>による『貯金の出来る経済の取り方：附・上品な内職』が発行された。嘉悦は、「物價はどんどん騰貴するばかりで、生活難の聲は至る所に盛になつて來ました」<sup>12)</sup>と、物價騰貴によって生活難が引き起こされていることを指摘している。

また、明治後期から大正時代にかけての官僚であった内田嘉吉<sup>13)</sup>も、1919年に発行された『安全第一生活法』において、物價騰貴に関する記述を残している。

米價につれて、すべての諸物價も漸騰歩調を辿り、遂に戦前の二倍、或ものに至つては三倍強の高値を唱ふるものさへ出來た、斯くの如き、諸物價は今や殆ど非常識の騰貴を來たして、我國民の生活を脅威すること甚だし<sup>14)</sup>

内田は、第一次世界大戦前と比較して、様々な物價が高くなったことで、生活難が引き起こされていることを指摘している。そのうえで、『安全第一生活法』では収入の増加を図るために内職を奨励している。

また、『主婦之友』1920年4月号の「上中流家庭にふさはしい婦人内職」という記事における、「物價騰貴＝生活難＝副業＝といふ風に家庭の内職が顧慮せられるやうになつたのは、誠に結構なことです」<sup>15)</sup>という記述から、物價騰貴による生活難を解消するため内職の必要性が高まっていたことがわかる。この記事では、そうした背景を踏まえたうえで、「多くの家庭では、この内職をどうすればよいかに迷つてゐなざるやうです」<sup>16)</sup>とし、具体的な内職の内容を挙げ、内職を奨励している。このような嘉悦や内田の指摘や婦人雑誌の記事の記述から、内職奨励の背景には物價騰貴による生活難が関係していたということがわかる。

大正期の物價変動の様子を知ることのできる資料として、農商務大臣官房統計課編『大正十年物價表』がある。これは1912年の物價を基準とした場合の年次ごとの品種別物價指数が記録されており、1912年から1921年までの物價変動の様子を知ることが出来る資料となっている。表1に、1912年を基準とした年次ごとの主な品種別物價指数を示した。

表1 1912年を基準とした場合の年次ごとの主な品種別物価指数

西暦(年)	品種											
	玄米	大麦	小麦	大豆	醤油	味噌	白砂糖	紡績綿糸	生糸	杉角材	塊鉄	
1912	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	
1913	104	95	104	104	101	102	97	99	103	102	97	
1914	76	65	96	103	101	99	98	78	102	103	96	
1915	61	58	101	82	97	91	102	75	98	104	141	
1916	64	60	99	95	96	91	107	101	134	113	238	
1917	95	98	120	125	109	108	115	180	151	145	428	
1918	157	177	198	168	133	158	129	254	178	201	566	
1919	225	195	205	202	175	208	178	368	251	282	273	
1920	上半期	247	222	238	254	238	256	242	384	323	424	301
	下半期	183	141	157	183	225	207	203	309	295	418	266
1921	上半期	130	116	157	128	233	174	152	162	171	282	185
	下半期	167	129	167	158	236	186	138	199	189	311	152

『大正十年物價表』「2 大正元年ヲ基本トセル物價指數品種別」をもとに作成

表1から、嘉悦の『貯金の出来る經濟の取り方：附・上品な内職』が発行された1917年頃から、多くの品種において物価が大幅に上昇していること、また内田の『安全第一生活法』が発行された1919年には、玄米、小麦、大豆、味噌、生糸などが1912年の2倍以上、紡績綿糸は3倍以上の価格になっていることがわかる。その後も物価は高騰し続け、多くの品種でピークを迎えた1920年には上記のほか、大麦、醤油、白砂糖といったものが1912年の2倍以上の価格となっている。食料品だけに限らず、紡績綿糸や生糸など衣料品に関するもの、また鉄などの原料品といった様々な品種において物価が高騰していたことから、物價騰貴は生活のあらゆる側面に影響を及ぼしていたと考えられる。

このような1917年頃から起こった大幅な物価の上昇は、第一次世界大戦の影響であると言われている。第一次世界大戦が起こり、欧州諸国からの輸入が途絶えたことで、それまでそれらの地域からの輸入に依存していた品種においてモノ不足による狂乱物価が生じた<sup>17)</sup>。また、欧州諸国から軍事注文が殺到するようになったり、欧州諸国から輸入していたアジア諸国やアフリカ諸国が日本から輸入するようになったりしたことで、日本の輸出貿易は急速に増大し、異常な輸出超過となったことも物價騰貴の原因とされる<sup>18)</sup>。このように、第一次世界大戦の影響による物價騰貴が生活難を引き起こしており、その生活難を解消するために内職が奨励されていた。

嘉悦や内田は当時の生活難について指摘していたが、都新聞の記者であった木下幹は1919年に発行された『婦人も働け』において、将来さらに酷い生活難が来るということ予測している。木下はその根拠について、「日本の現代では餘りに人が多過ぎる」こと、「多過ぎる日本國民は南にも東にも人口の少ない國と接してゐながら、移民するといふことが出来ない」こと、「外國が擧つて經濟上の壓迫をしてゐる」ことの3点を挙げている<sup>19)</sup>。

木下は、人口の過剰がなぜ生活難を引き起こすのかという点について説明はしていない。しかし、『婦人も働け』が発行される前年の1918年に起こった米騒動が、人口と食糧の不均衡によって生じたものと考えられたために、この時期の日本では人口問題が国民的関心事になっていたと言われている<sup>20)</sup>。

木下は、このような過剰人口が引き起こす問題から逃れるために、日本から外国に移住しようとしても「今度の講和會議で、(中略)移民の自由を得なければならないといふ提案、即ち人種差別撤廃案は、講話會議で英のロイドジョージ氏や、米のウエルソン氏や、濠州のヒューズ氏に依つて、見事蹴落れてしまつた」<sup>21)</sup>ため、それは不可能なことであると述べる。この記述における「講話會議」とは、1919年に開催されたパリ講和會議のことを指している。この講和會議において日本は人種差別撤廃案を提案した。永田は、明治末期にアメリカの一部地域から排日運動が盛んに行われるようになり、カリフォルニア州では1913年に「帰化能力のない外国人の土地所有禁止法案」、所謂「排日土地法」が制定されたこと、またこの土地法の制定が日本国民の感情を強く刺激し、国民集会などで日米必戦論が叫ばれるようになるなど、日米間における移民問題が両国国民感情の問題にまで発展していったことを背景として、日本が人種差別撤廃案を提案したということを明らかにしている<sup>22)</sup>。日本は、このような日本人移民問題を解決するために人種差別撤廃案を提案したが、この案は採用されなかった。このことによって、移民問題の解決が困難になったという見通しが人々に心理的な不安感をもたらしたと考えられる。

また木下は、第一次世界大戦後に武力ではなく、経済戦争が起こるということを指摘したうえで、次のように述べる。

この経済上の戦争では今迄味方であつた英國や、米國は大なる敵國となるのであります。日本の立場は全く孤立です。隣邦の支那の如きも、經濟上の戦争、即ち平和の戦争では日本に好意を持つて呉れない、支那の南部でも北部でも盛んに日本の貨物を排斥してゐるのです<sup>23)</sup>

木下は、第一次世界大戦において、日本は米国や英国と同じ連合国側だったが、経済戦争においては米国や英国は敵国となるということを指摘している。また当時中国では、1915年に日本が二十一カ条の要求を行ったことに対して、日本商品を排斥する日貨排斥運動が起こっていた。このような背景を踏まえたうえで、木下は経済戦争において「日本の立場は全く孤立」だとしている。

木下は、以上の3点を根拠として将来さらに酷い生活難が来ると予想しており、その生活難は「一時的なものでなく永久的のものである、日本國民全體の上に来る大生活難であります」<sup>24)</sup>と述べている。そのうえで、将来起こるであろう生活難の解消のための手段として内職を奨励している。

以上から、内職の奨励には、第一次世界大戦の影響による物価騰貴が生活難を引き起こしていたという背景があったことがわかる。また、将来的にさらに深刻な生活難が来ると考えられていたことも内職が奨励された背景の1つと言える。

### 国家の発展のための内職

内職奨励の背景として、内職に従事することが結果的に国家の発展につながると考えられていたということがわかる記述も、いくつかの書籍や婦人雑誌の記事に見られる。1915年に発行された、東部通信局編『内職奨励ニ関スル事項』は、性別、家族内の地位、貧富に関わらず内職を行うべきだと主張し、その理由について次のように述べている。

國際競争ノ盛ナル今日、國家ノ基礎ヲ強固ニシ、益々其發展ヲ圖ラントスルニハ、先ツ國富ノ増進ニ努力セサルヘカラス。(中略) 故ニ吾人ハ國民ノ一員トシテ國富ノ増進ヲ企圖スルハ、正ニ其責務トモ稱スヘキモノニシテ、男子タルト女子タルト、又家長タルト家族タルト、竝ニ富メルト貧シキトニ拘ハラズ、勤儉行相當ノ報酬ヲ得ルコトハ、亦實ニ一面國家ノ富強ヲ増ス所以ノ道ナリトス<sup>25)</sup>

この記述では、内職に従事することは国富を増進させることとなり、国富が増進することで国家の基礎が強固になるという理由から、性別、家族内の地位、貧富に関わらず内職が奨励されていたことがわかる。このような理由から、『内職奨励ニ関スル事項』では、内職を「國民トシテノ責務」であるとしている。

これに対して先にも触れた嘉悦の『貯金の出来る経済の取り方：附・上品な内職』では、「國家の中堅となるべきものは即ち中流階級でありまして、この中流階級に於て其の生活の根柢がぐらついてゐては、到底國家の發展を期することが出来ないので御座います」<sup>26)</sup>と述べたうえで、中流階級の生活の安定のために、貯金をするべきだと主張し、貯金をするためには内職に従事するべきだと奨励している。国家の発展を家庭が支えていると考えられていた点については『内職奨励ニ関スル事項』と同様であると言えるが、『内職奨励ニ関スル事項』が内職を「國民の責務」としていたのに対し、嘉悦は国家の中堅となるものは中流階級だとして、中流階級に対して内職を奨励しているという点に違いが見られる。

司法官、政治家、教育者として活躍した山脇玄<sup>27)</sup>は、1919年に発行された『家庭経済講話』において、「一國の興廢は、個々の家庭が進歩するしないとに由つて、決する。即ち家庭が進めば其の國は盛になり、家庭が腐敗すれば其の國は衰へる」<sup>28)</sup>と述べている。山脇は、国家の発展には家庭の進歩が必要であるとして、家庭の進歩のために家政を經營する主婦に対して、共同飯炊所の設置、三度の食事の簡易、住家の改造、訪問接客法の改良などの生活改善を行うことを提案し、その生活改善によって生まれる空いた

時間に内職を行うべきであると主張している。大正期において「家庭」というと、主に中間層を指していると考えられ、この点において嘉悦が中流階級に向けて内職を奨励している点との重なりがある。

以上の書籍の記述では、国家の発展は家庭が支えているのであって、家庭を経済的側面において安定させるために内職が奨励されていたという点が共通している。内職奨励の対象とした層について、性別、家族内の地位、貧富を問わず国民全員とするものもあるが、嘉悦や山脇の記述において、特に中間層の家庭が重要視されていたことは注目すべきである。また婦人雑誌においても、内職に従事することが国家の発展のためとなるという背景から、内職を奨励していたことがわかる記事が見られた。『主婦之友』1920年4月号の「上中流家庭にふさはしい婦人内職」では、婦人に対して輸出向きの美術工芸品を作る内職を奨励したうえで、次のように述べている。

一人の婦人の力は極く微々たるものではありませんが、これが幾十萬人幾百萬人と集つた暁にはかなり大きな仕事が出来得るのです。相當のものさへ出来るやうになれば、海外の需要は無限です。僅かの婦人の力、今日まで只だ有耶無耶に暮して来た婦人の時間から、斯くも盛大な輸出品を産出することが出来たならば、啻に一人一家の利益ばかりでなく、實に國家の大なる利益となるのであります<sup>29)</sup>

この記事は、多くの婦人が輸出向き美術工芸品製作の内職に従事することが、最終的には国家の利益につながるという理由から、内職を奨励している。このことから、内職が国家の利益を増大させるものであると考えられていたことがわかる。国家の利益が増大することは、国家の発展に関わることである。加えて、輸出向きの工芸品の製作は、外貨獲得の重要な手段となりうるものであり、外貨獲得もまた国家の発展につながることだと言える。そのためこの記事においても、国家の発展のためという背景から内職が奨励されていたことがうかがえる。

以上のように、国家の基礎となる家庭が安定したり、国家の利益が増大したりすることで、国家が発展すると考えられていたために、大正期に内職が奨励されていた。

## 第2節 奨励された内職の内容と内職に対する認識

本節では、大正期に奨励された内職の具体的内容およびその特徴、また当時内職に対してどのような認識が一般的であったのかという点について明らかにする。

### 奨励された内職の具体的内容

大正期の書籍において奨励された内職の具体的内容を表2に、婦人雑誌において奨励された内職の具体的内容を表3に示した。

表2 書籍において奨励された内職の具体的内容

発行年	書籍名	著者・編者	奨励された内職の具体的内容
1913年	『新説処世大鑑』	大日本家政学会編	裁縫、編物、ミシン、造花
1915年	『をりをり草』	跡見花蹊	刺繍、造花、絵画
1915年	『内職奨励ニ関スル事項』	東部通信局編	パテンレース、毛糸シャツ・靴下編み、ジャケットの縫い付け、麻糸継、麻紐継、足袋甲縫、足袋仕上げ、鼻緒製造、葉袋張り、菓子袋張り、状袋張り、歯磨楊枝毛植、刷毛製造、印刷物の折畳み、麻裏草履裏付け
1915年	『貯金の秘訣』	安田操一	仕立物、編物、刺繍、靴下編み、造花、麻の糸まき、羽織の紐、真綿延し、マッチ箱貼り、障子紙はり、麦稈編み、状袋貼り、罨紙刷り
1916年	『現在の生活費から思はぬ貯金を産み出す法』	嘉悦孝子	翻譯、夜学を教える、内弟子を取る、雑誌の原稿を書く、家庭教師、琴・活花の教授、裁縫、パテン
1917年	『貯金の出来る経済の取り方：附・上品な内職』	嘉悦孝子	血敷及び花瓶敷を編む内職、サレベルを編む内職、手袋を膝る内職、木綿の仕入衣を裁縫する内職、印袴纏を裁縫する内職、豆人形の衣服を裁縫する内職
1919年	『安全第一生活法』	内田嘉吉	仕立物、刺繍、紐編み、ハンカチの下付け、足袋の小鉤かけ、爪皮縫い、人形の着物、レース糸の編物、靴下の仕上げ、枕カバーの製造、下駄の鼻緒の製造、団扇の骨編み、マッチの箱貼り、袋貼、熨斗折り、
1919年	『婦人も働け』	木下幹	麻糸つなぎ、麦稈真田、経木真田、刺繍、紙袋、封筒貼り、熨斗製造、ミシン裁縫、裁縫、編物、パテン、テネリフ、ドロンオーク、造花、扇子・団扇製作、下駄付属品（鼻緒・草履）製作、ボール箱製造、紋り染め、養鶏
1919年	『家庭経済講話』	山脇玄	編物、袋物、刺繍、造花
1923年	『女が自活するには』	日本職業調査会編	和服裁縫、毛糸編物、ミシン裁縫、靴下の美術かがり、封筒張・巻紙張、製本紙折、メリヤス製品かがり、セルロイド加工、熨斗折り、造花、袋物、つまみ細工、押絵細工、刺繍
1925年	『貯金の出来る簡易生活法』	高村光徳	編物、造花



表3 婦人雑誌において奨励された内職の具体的内容

発行年	月	雑誌名	記事タイトル	内職の具体的内容
1913年	11月	『婦人之友』	「婦人の内職としての養蜂」	養蜂
1914年	12月	『婦人之友』	「内職としてのミシン刺繍」	ミシン刺繍
1918年	7月	『主婦之友』	「上品で利益の多い家庭の新内職」	刺繍、絞り染め、パンチオーク、足袋裏縫い、手袋縫い、紙箱張、輸出編物、紐編み、絹糸巻
1919年	1月	『主婦之友』	「中流家庭の理想的内職案内（新京鹿の子絞）」	京鹿の子絞り
1919年	3月	『主婦之友』	「新京鹿の子絞の内職とその絞方」	京鹿の子絞り
1919年	11月	『主婦之友』	「上品で収入の多い靴下の飾刺繍（内職案内）」	靴下飾刺繍
1919年	12月	『主婦之友』	「趣味があつて収入の多い半襟刺繍（内職案内）」	半襟刺繍
1920年	4月	『主婦之友』	「上中流家庭にふさはしい婦人内職」	輸出向きの美術工芸品
1921年	4月	『主婦之友』	「唯一の有望な内職としての新京鹿の子絞」	京鹿の子絞り
1922年	4月	『主婦之友』	「中流向内職として靴下刺繍の復活」	靴下刺繍
1923年	11月	『主婦之友』	「有望になつた毛糸編物内職案内」	毛糸編物
1925年	3月	『婦人倶楽部』	「東京にある有利確實な婦人向内職案内」	人形細工、鼻緒縫い、裁縫、足袋製作と販売、封筒張り、組紐、学生靴、爪掛、コート仕立、洋傘製造
1925年	5月	『主婦之友』	「確實な婦人の内職と収入案内」	製袋業、国旗の縁縫い、テーブルクロス の縁縫いと刺繍、靴下止め、亀甲紗のレース袋、裁縫、編物、刺繍、ネクタイ縫い、輸出ハンカチの下付け、絹ハンカチのフランス刺繍、フィレーレース、人形の洋服と帽子編み、絞り染め

表2、表3からは、多種多様な内職が奨励されていたことがわかる。表2で挙げた内職の中には、男性に向けたものや、老若男女問わずに勧められた内職も存在している。例えば、嘉悦孝子の『現在の生活費から思はぬ貯金を産み出す法』では、翻訳、夜学を教

える、内弟子を取る、雑誌の原稿を書くといった内職が男性向きのものとして奨励されている。先にも触れた東部通信局編『内職奨励ニ関スル事項』では、足袋甲縫い、菓子袋張りといった内職が老若男女誰でもできるものとして奨励されている。

また、婦人雑誌においては、主な読者層が女性であるため男性のみを対象とした内職は挙げられてはいないものの、子供や老人にも簡単にできるとされる内職がいくつか取り上げられている。『婦人倶楽部』1925年3月号の「東京にある有利確實な婦人向内職案内」という記事では、鼻緒を縫う内職が子供や老人にもできるとされていたり<sup>30)</sup>、『主婦之友』1925年5月号の「確實な婦人の内職と収入案内」では、封筒や菓子袋などを製造する製袋業が子供にもできる内職だとされていたりする<sup>31)</sup>。このように書籍や婦人雑誌の記事において奨励された内職には、一部ではあるものの、男性向けの内職や子供や老人でもできる内職が取り上げられていることから、内職の対象者とされていたのは女性だけではなかったことがわかる。しかし落合が、近代家族の特徴の一つとして、夫は「ソト」という公共領域において生産活動を通じて社会参加する役割を担い、妻は「ウチ」という家内領域において家庭の家事や育児といった仕事を一手に担っていたと挙げている<sup>32)</sup>ことから、家内領域である家庭で行われる内職に従事する存在としては、主に婦人が想定されていたと考えることができる。

婦人の中でも特に、中流以上の婦人に対しては、内職であればどのようなものに従事していても良いとされていた訳では無かったようである。第1節でも取り上げた嘉悦の『貯金の出来る經濟の取り方：附・上品な内職』では、中流以上の婦人に適当な内職について、「どこまでも上品な種類に属するもの。どこまでも婦人的に属するもの。この二要素を具備して居る内職でなければなりません」<sup>33)</sup>と述べられている。また、その条件に該当する内職として、「皿敷及び花瓶敷を編む内職」や「木綿の仕入衣を裁縫する内職」といった手芸内職が奨励されている。

山脇玄は、先にも触れた『家庭經濟講話』で婦人の内職について、「中流以上の家庭に適したものと云へば、やはり編物、袋物、刺繡、造花等であらう」<sup>34)</sup>と述べている。山脇は、何故中流以上の家庭に編物、袋物、刺繡、造花等が適しているのかという理由については述べてはいないが、嘉悦と同様に、中流以上の婦人に適当な内職として手芸内職を奨励している。

安田操一は『貯金の秘訣』において、下流社会では共稼ぎが当たり前のことであるから、中流以上の家庭の婦人も内職をすることで夫の稼ぎの助けとなるべきだということを主張し、中流以上の婦人に向く内職について、「割合に美しい内職となると、東京邊では仕立物、編物、刺繡、靴下編みなどや、造花のやうなものがあります」<sup>35)</sup>と述べている。安田もまた、中流以上の婦人に対して手芸内職を奨励している。このように、中流以上の婦人が従事する内職には、「上品」「婦人的」「美しい」という条件に当てはまるものが適当とされており、その条件に合うものとして、手芸内職が奨励されていた。

また、婦人雑誌の記事からは、上品さや美しさだけでなく、収入や利益が多いことも内職を奨励するうえで重要な点であったことがうかがえる。表3に挙げた記事タイトルには、「上品で利益の多い家庭の新内職」や「上品で収入の多い靴下の飾刺繍（内職案内）」、「趣味があつて収入の多い半襟刺繍（内職案内）」、「確かな婦人の内職と収入案内」といったように、上品であることのほかに、収入や利益の多さに着目した記事がいくつか見られる。これらの記事においても、主に裁縫や刺繍といった手芸内職が共通して奨励されている。このことから、手芸内職は上品で美しい内職であるだけでなく、収入や利益の面から見ても良いとされていたと考えられる。

以上から、中流以上の婦人に内職を奨励する際には、「上品」「婦人的」「美しい」というような要素を持っているのか、収入や利益が多いのかという2つの点が重要視されていたこと、またその2つの点を兼ね備えている手芸内職が、中流以上の婦人に適当な内職として主に奨励されていたことが明らかになった。

### 内職に対する認識の転換

大正期において、内職は主に婦人が従事するものと考えられており、特に中流以上の婦人に適当な内職としては手芸内職が奨励されていたことを明らかにしたが、当時は内職に従事することに対して良いイメージが無かったようである。大正期において、内職に従事することが恥であるという認識が一般的であったことがうかがえる記述が複数の書籍において見られる。

女流女子教育家で、跡見女学校の創設者である跡見花蹊<sup>36)</sup>は、1915年に発行された『をりをり草』の中で、「一口に内職と申しますと、大變お品の悪い、假にも身分のあるものゝ爲すべき事ではないやうに考へられますが、私はさうではなからうと考へます<sup>37)</sup>」と、内職が「大變お品の悪い」ものと考えられていることを問題視している。第1節でも取り上げた『婦人も働け』においても、著者の木下は、日本には『内職などは』と労働を蔑む習慣がある<sup>38)</sup>ことを指摘している。跡見や木下の記述から、内職従事に対して良いイメージが抱かれていなかったことがわかる。

先にも触れた東部通信局編『内職奨励ニ関スル事項』では、「内職ハ恥ツヘキコトニ非ス」としたうえで、「之<sup>39)</sup>ヲ恥辱の如ク思考スルハ、日本ニ於ケル在來ノ慣習上然ルモノナリ。諸外國ニ於テ恥辱トセサルモノ、豈獨リ我國ニ於テノミ之ヲ恥辱トスヘケンヤ<sup>40)</sup>」と述べられている。また、先にも取り上げた安田操一による『貯金の秘訣』においても、当時の内職に対する認識について同様の記述が見られる。

内職といふと、なんだか卑しいやうに思はれるのが、日本の現在の状態であります。（中略）つまり恥のやうに思つてゐるのです。しかし、外國の有様を聞きますのに、決して、このやうなことはないさうです。婦人の職業として立派に多くの人に行は

れてゐるやうです<sup>41)</sup>

これらの記述では、内職を行うことが恥だという認識があることだけでなく、その認識は日本ならではのものであることが指摘されている。また、日本と外国の労働に対する意識の違いについて取り上げ、外国では内職に従事することを恥だとはしていないため、日本でも内職に従事することを恥だとするべきではないというように、日本における内職に対する認識を改めようとしていた様子がうかがえる。

先にも触れた嘉悦孝子の『貯金の出来る経済の取り方：附・上品な内職』では、内職を恥だとする認識が、内職に従事しようとする人々に悪影響を与えていることを指摘している。

内職などをして、それを他人に見られるのが恥かしいとか何とか誤解し、行つて見たいとは思ひながらも、そのまゝ手も出さずに控へて了ふ方が多いやうであります。甚だいはれなき僻見だと申さねばなりません<sup>42)</sup>

嘉悦は、内職に従事することが恥であるという認識が、人々が内職を始めるうえでの大きな壁となっていることを問題視している。嘉悦はこのような認識を誤りであり、内職に従事すべきだと説いている。また内職を恥だとする認識が、実際に内職に従事していた人々にも影響を及ぼしていたことがわかる記述も見られる。山脇玄は、先にも触れた『家庭経済講話』において、次のように述べている。

由來日本人は、遊んで暮すのを上品のやうに思ひ、働くことを卑しめる習慣がついて居るので、婦人の如きも、内實は手内職をやつて居ても、表面には成るべく見えないやう他人に知られないやうにと努める風がある<sup>43)</sup>

山脇は、実際には内職に従事していても、内職に従事することが恥であるとされているために、内職をしていることを隠す風潮があるということを指摘している。同じく1919年に発行された、小林書店編『家事経済良妻』においても、「内職とは他人に知れぬ様内々である職業を爲すとの意にとつて、この内職を甚だ恥かしき事に考へ努めて被隠すのが一般の状況である」<sup>44)</sup>と、山脇と同様の指摘をしている。

加えて、先にも取り上げた内田嘉吉の『安全第一生活法』では、「日本、殊に東京の人は、妻に内職せしむることを非常に恥ぢと」<sup>45)</sup>しているということが述べられている。この記述からは、都市部の新中間層の夫にとって、妻に内職をさせることはプライドに関わることであったと考えられていたことがわかる。

以上のように、教育者や、行政、ジャーナリストといった様々な立場から、内職に従

事することを恥だとする認識があったということが述べられており、内職に従事することを恥だとする認識は、大正期において一般的なものであったと言える。このような認識は、内職を始めることができなかつたり、内職に従事していることを隠したりする風潮の原因となっていたという。また、都市部の新中間層の夫にとって、妻が内職に従事することはプライドに関わる問題であった。このような内職を恥だとする認識や、その認識が人々に及ぼした影響については、新中間層の労働に対する意識が関わっていると考えられる。新中間層において、夫は「ソト」で仕事に従事し、妻は「ウチ」で家事育児を一手に担うという性別役割分業意識があり、この意識が家庭内での妻の労働を過剰に忌避させたと捉えることができる。そこで、このような労働意識を改めるために、内職を奨励する内容の書籍が発行されたり、婦人雑誌に内職を奨励する記事が掲載されていたりしたと考える。

## 第2章 婦人雑誌から見る新中間層の婦人における内職の実態

### 第1節 内職従事者の目的

新中間層の婦人を主な読者としていた婦人雑誌には、大正期を通じ、読者投稿による内職経験談の記事が多数掲載されていた。本節では、『婦人之友』『主婦之友』『婦人倶楽部』に掲載された内職経験談記事から、新中間層の婦人がなぜ内職に従事するようになったのか、その目的について探っていく。なお、内職経験談の記事を投稿した人物が必ずしも新中間層に属していたのかという点については定かではないが、本稿で取り上げている婦人雑誌はいずれも新中間層の婦人に向けて発行されたものであるため、本節では記事の投稿者を新中間層として扱うこととする。

### 収入を得るため

『婦人之友』『主婦之友』『婦人倶楽部』の内職経験談の記事において、収入を得るという目的で内職に従事するようになったという投稿が多数見られた。『婦人之友』1917年2月号の「幸運と悪運は何處からめぐつて来たでせうか」という記事では、夫の収入だけでは一家を支えることが出来なかつたため、麻糸つなぎ<sup>46)</sup>の内職に従事するようになったという婦人の投稿が掲載されている<sup>47)</sup>。『婦人倶楽部』1923年7月号の「各種副業内職の実験談」では、「病弱の夫に仕へながら、一人の幼児を育てつゝ一家の生計を立て、行かねばならぬ苦しい境遇」<sup>48)</sup>のため、ゴムの加工仕事の内職に従事している婦人の投稿が掲載されている。また、『主婦之友』1923年7月号「内職で生活する人の経験」には、「その当時の月給といつたらそれは僅少で、到底二人が生活することはできませんでした」<sup>49)</sup>というように、夫の給料だけでは生活できないという理由から、夫の給料

の他に収入を得るために、毛糸編物の内職に従事するようになったという投稿がある。この経験談では、朝から夕方までは婦人が内職に従事し、夜は夫婦2人で内職に従事していたという経験が語られている。夫も内職に協力していたという点は注目すべきだが、この点について詳しくは第4節で述べる。

これらの投稿からは、新中間層の婦人が、生活のために夫の給料の他に収入を得る必要があり、内職に従事していたということがわかる。また生活費に加え、さらに子供の教育のための収入が必要だという理由から内職に従事するようになったという投稿も多数掲載されている。

『主婦之友』1923年7月号の「内職で生活する人の経験」には、夫に先立たれた2人の子供をもつ婦人が、大した貯金も無い中で、子供の教育を相当にしてやりたいという理由から、袋物を製作する内職に従事するようになったといった内容の投稿がある<sup>50)</sup>。また、『主婦之友』1924年6月号の「内職に成功した人々の実験」という記事でも、同様に子供の教育のためという理由から内職に従事するようになったという婦人の投稿が見られる。

始めた動機といつても、實は私共の長男は二十二歳ですが、幼いときから畫を描くことが好きで、どうしても畫で身を立たいと申してをりました。ところが思想の相違と申ませうか、主人はそれには大反対で、畫などで食べるのは容易なことではないから、中學教員の検定でも受けてパンを得る道を講じてから、そのかたはら好きならば描いたら良いと言ひます。恰度その頃は主人もある事業に失敗をしたときでしたから、家計の方も困難になつて、尚更ら長男の志望はむづかしくなりましたが、さうかといつてその失望落膽を見ますととても忍びなく、どうかしてやりたいといふ氣持が一杯になるのです。それに私にはまだその他に五人の子供がをりますが、その子供達もこの後大きくなつてから、それぞれ自分の行く道へ進めてやらなければなりません<sup>51)</sup>

この経験談の投稿者は、子供たちそれぞれの進路を叶えるために、「先立つものは資力です」としており、資力を得ることを目的として手提げ袋を製作する内職を始めている。以上に取り上げた投稿では、内職に従事した目的として、夫の死去や事業失敗により収入が減少したことについて触れてはいるものの、表面的には子供の教育費を稼ぐためということを挙げている。

沢山は、新中間層における子供に対する教育意識に関して、子供を人並み以上に育てることが家族の主要価値とされていたこと<sup>52)</sup>や、学力と学歴をつけていくことが、より良い生活、子供の幸福につながると考えられていたこと<sup>53)</sup>を明らかにしている。このような新中間層における子供に対する教育意識から、新中間層の婦人が子供の教育のため

の資金を得るといった目的で内職に従事していたと考えられる。

またそのほかにも、不時の際に備えるために、収入を得る目的で内職に従事するようになったという投稿もある。『主婦之友』1922年12月号「内職副業に成功したる実験」の記事には、次のような投稿が見られる。

私ども夫婦が戀の勝利者として、初めて家庭を持つやうになつたのは、大正九年一月のことでございました。精神的には幸福すぎたものでしたけれど、たえず經濟的脅威から、まぬかれることはできませんでした。如何に切り詰めても、良人の月々の給料では、二人の生を辛うじて支えるに過ぎませんでした。不時の際の準備をする、餘裕をもたぬ人々の胸をおそふ不安の感は、私どもにも痛切に感じさせられました<sup>54)</sup>

この経験談の投稿者は、夫の給料だけで生活ができない訳ではないが、不時の際に備えるだけの余裕がなかったという。そのため、夫の給料のほかに収入を得るといった目的で内職として養蜂を始めている。

以上の投稿から、生活のため、子供の教育のため、不時の際に備えるためなど、投稿者により理由は様々であるが、こういった理由から新中間層の婦人は収入を得る必要があったということ、またそのために、彼女たちは収入を得るといった目的で内職に従事するようになっていたことがわかる。

### 暇な時間を活用するため

婦人雑誌の内職経験談には、収入を目的として内職に従事したという投稿のほか、暇な時間を活用するという目的で内職に従事するようになったという投稿も多数見られる。

『婦人之友』1912年12月号の「婦人の職業に對する様々の経験（二）」には、子供がおらず、女中を雇っているために暇な暮らしをしている婦人が、その時間を活用するために編物の内職に従事するようになったという投稿が掲載されている<sup>55)</sup>。同じく『婦人之友』1923年2月号の「私の内職」という記事には、子供の世話のために子守を雇ったことで、暇な時間が生まれ、その時間を活用して、仕立物の内職に従事するようになった婦人の投稿がある<sup>56)</sup>。また、『主婦之友』1924年6月号の「内職に成功した人々の実験」という記事には、次のような経験談が投稿されている。

私はちと名古屋にをりましたが、子供達が大きくなりましたので、その教育のために上京してまゐりましたのが、今から五年前でございました。幸ひに長男は某大學に、長女は女學校といふやうにそれぞれ學校へまゐりますし、家事の方は長らく

る婆やがすつかり引き受けてくれますので、私はほんとに暇な身体でございました。それに田舎とちがつて近所の交際もなく、さうかといつて今日は帝劇、明日は三越といふやうに浮かれ歩く身分でもなし、至つて無聊な生活なものですから、何か自分にできる仕事でもあればと心がけてをりました<sup>57)</sup>

この投稿者は、家事や子育てをする必要がなかったために、暇な時間を持って余しており、その暇な時間にできるものとして廃物を買集めて玩具を製作する内職を始めたという。

このように新中間層の婦人が暇な時間を活用するという目的で内職に従事するようになった理由には、暇なことが彼女たちの精神的負担になっていたことが挙げられる。『婦人之友』1917年4月号の「ひまな主婦の内職會」という記事では、次のような経験談が投稿されている。

私共には子供もなく、只母が居りますばかりの、ホントの少人数でございますから、主人を銀行に送り出した後は、ひつそりと静まりかへつて、なかなか笑ふ機会もないやうな有様でございまして、たまに主人の歸りの遅くなるやうな時は、たゞ火鉢にもたれて鐵瓶の湯氣の行方と時計ばかり眺めて、歸りのおそい正しい理由も判つてみすのに、ツイつまらないことを考へたりして、氣持よく迎へやうと思つても、知らず知らず淋しい笑顔で迎へるやうなこともありました。これではいけない、暇のあり過ぎるといふことは、いろいろな點からよくないことだ、家の中をもつと忙しくしたいと思ひまして、二三の方に話して見ると、やはり外にも私のやうな方が澤山ありましたので、それではお互に共同して何か仕事をしませう。それには種々な不馴れな事よりも、お互に腕に覚えのある裁縫がいゝでせうといふことになつて、この會を初めることになつたのでございます<sup>58)</sup>

この投稿では、投稿者が「暇のあり過ぎるといふことは、いろいろな點からよくないことだ」という理由から、投稿者と同じように暇な時間を持って余している婦人たちと共同し、暇な時間を活用するために、裁縫の内職に従事する會を立ち上げたという経験が語られている。投稿者は、裁縫の内職に従事する會を立ち上げたことで、「今まで沈み切つてみました家の空氣が晴れやかになつて、大人揃ひの家の中にも笑ひ聲が起るやうに陽氣になりました」<sup>59)</sup>と述べている。内職に従事する以前の「なかなか笑ふ機会もないやうな有様」が精神的負担となっていた投稿者にとって、内職はその精神的負担を軽減させるものであったのである。

また『婦人之友』1918年3月号「かうして私は職業を得ました」という記事では、あまりの退屈さに紹ざしの内職を始めた婦人が、内職に従事するようになったことで「今



までのやうに時間を無駄に家事をしてゐるやうなことはなく、毎日のこともいそしんで、キッチンキッチンと短い時間にかたづけて、婦人之友を参考に苦心しては、一つ一つを仕上げるのでした<sup>60)</sup>という経験談を投稿している。この投稿からは、内職のおかげで精神的な張り合いが出たために、家事の効率化を図ることができたということが読み取れる。

以上見てきたように、新中間層の婦人は、暇な時間を活用するために内職に従事していた。内職には収入を得るという実利的側面だけでなく、自己実現を求める女性たちの新しい意識に対応していた側面があったのである。

### 内職奨励の背景と内職従事の目的の相違点

ここで、第1章第1節で明らかになった内職奨励の背景に着目すると、内職奨励の背景と新中間層の婦人が内職に従事した目的は必ずしも一致していないことがわかる。内職奨励の背景の1つとして、国家の発展のためというものがあつたが、内職経験談において、国家の発展のためという目的で内職に従事したという投稿は、管見の限り見られなかった。

そのため、婦人が内職に従事する際には、国家という存在がほとんど意識されておらず、婦人は国家のために内職に従事していたというよりは、家庭や婦人自身のために内職に従事していたと言える。

### 婦人雑誌の読者層の違いと内職従事の目的との関係

新中間層の婦人が内職に従事した目的には、収入を得るためと、暇な時間を活用するためという2点があることを明らかにしたが、『主婦之友』には収入を得るという目的から内職に従事したという投稿が多く見られる一方で、『婦人之友』には暇な時間を活用するという目的で内職に従事したという投稿が多く見られる。また、『婦人倶楽部』には収入を得るという目的から内職に従事したという投稿は見られるものの、暇な時間を活用するという目的で内職に従事するようになったという投稿は、管見の限り見られなかった。

このことは、婦人雑誌の読者層に関係していると考ええる。序章でも述べたように、『婦人之友』『主婦之友』『婦人倶楽部』はいずれも新中間層が主な読者層ではあつたものの、『婦人之友』は高級官僚や高級サラリーマン、大学教授などの新中間層上層が主な読者層であつたと言われている。そのため、『主婦之友』『婦人倶楽部』の読者層と比較して、より社会階層の上層に位置する『婦人之友』の読者層は、『主婦之友』『婦人倶楽部』の読者層ほど、家計に困ることがあまりなかったために、収入を得るという目的で内職に従事しているという投稿も少なくなっており、また、『主婦之友』『婦人倶楽部』の読者層は、『婦人之友』の読者層よりも社会階層が低いため、収入を目的として内職に従事しているという投稿が多数見られるのではないかと考える。

## 第2節 婦人が従事した内職の具体的内容

本節では、婦人雑誌に投稿された内職経験談の記事から、実際に婦人たちがどのような内職に従事していたのか、その内容および特徴について明らかにする。

表4 婦人が従事していた内職の具体的内容（『婦人之友』）

発行年	月	雑誌名	記事タイトル	内職の具体的内容
1912年	11月	『婦人之友』	「婦人の職業に對する様々の経験」	洋傘のラップつけ、ミシン
1912年	12月	『婦人之友』	「婦人の職業に對する様々の経験(二)」	編物、小売店
1917年	2月	『婦人之友』	「幸運と悪運は何處からめぐつて來たでせうか」	麻糸つなぎ
1917年	4月	『婦人之友』	「ひまな主婦の内職會」	裁縫
1918年	1月	『婦人之友』	「成功のよろこび、失敗の教訓」	仕立物
1918年	3月	『婦人之友』	「かうして私は職業を得ました」	紹刺し、絞り、編物
1918年	12月	『婦人之友』	「今年に於ける生活を顧みて」	裁縫
1920年	6月	『婦人之友』	「私の職業に従事してゐる譯—従事しない譯」	ミシン
1923年	2月	『婦人之友』	「私の内職」	経木織、仕立物、ミシン、裁縫
1923年	4月	『婦人之友』	「私の内職」	編物、ミシン

表5 婦人が従事していた内職の具体的内容（『主婦之友』）

発行年	月	雑誌名	記事タイトル	内職の具体的内容
1917年	7月	『主婦之友』	「上品で利益の多い内職の経験」	バテン製作、学用品販売、生糸つなぎ、編物、刺繍、裁縫
1917年	12月	『主婦之友』	「妻の働きて収入を殖した経験」	編物
1918年	9月	『主婦之友』	「成功した内職と副業の経験」	鶉の飼養、狆の飼養、ミシン、造花、養蜂
1918年	11月	『主婦之友』	「一週間の稽古で月三十圓取れる焼繪内職」	焼繪
1918年	12月	『主婦之友』	「上品で収入の多い靴下の飾刺繍の内職」	靴下飾刺繍
1919年	7月	『主婦之友』	「内職に成功した経験」	文房具店、靴下飾刺繍、養鶏、縄綯、
1919年	9月	『主婦之友』	「家事の傍ら従事する中流主婦の内職実験」	琴、茶の湯、生花の師匠
1920年	3月	『主婦之友』	「子供の守をしながらでも出来る有利な足袋の内職」	裁縫
1922年	12月	『主婦之友』	「内職副業に成功したる実験」	養蜂、下駄の籐表製作、摘内職
1923年	7月	『主婦之友』	「内職で生活する人の経験」	毛糸編物の加工、ミシン、紙箱貼り
1924年	6月	『主婦之友』	「内職に成功した人々の実験」	袋物内職、玩具制作、編物、仕立物

表6 婦人が従事していた内職の具体的内容（『婦人倶楽部』）

発行年	月	雑誌名	記事タイトル	内職の具体的内容
1923年	7月	『婦人倶楽部』	「各種副業内職の実験談」	ゴムの加工、紙折り、紙箱貼り、養鶏
1925年	10月	『婦人倶楽部』	「内職による我が家の貯金法」	房糸製作、裁縫、商品販売

表4～表6は、婦人雑誌ごとに、実際に婦人が従事していた内職の具体的な内容を示したものである。なお、内職の具体的内容の欄に、複数の内職が挙げられている場合があるが、これは1つの記事において複数人の内職経験談が投稿されているためである。

表4～表6からは、婦人が従事した内職には、裁縫、編物、刺繍などの手芸内職、養蜂、養鶏、狎や鶉の飼養といった畜産に関する内職、商品の販売を行う内職、琴、茶の湯、生花の師匠の内職など、様々な種類のものがあつたことがわかる。婦人雑誌ごとの特徴としては、『婦人之友』にはミシンや編物のような技術を必要とする内職が多く、『主婦之友』には幅広い内容の内職が見られ、『婦人倶楽部』には紙箱貼り、紙折りなど技術を必要としない内職が見られるという違いがある。この違いについては、婦人雑誌の読者層の違いに関係していると推測される。

一方で共通点としては、『婦人之友』『主婦之友』『婦人倶楽部』のいずれにも手芸内職が見られることである。このことから、手芸内職は新中間層の婦人が従事する内職として代表的なものであつたと言える。婦人が従事する内職として、手芸内職が代表的なものであつた理由には、次の2点が考えられる。

1点目は、手芸内職によって得ることの出来る工賃が比較的高かつたということである。1921年、東京市における内職の実態を調査した『内職に関する調査』が東京市社会局により発行された。『内職に関する調査』では、内職の種類別に、内職従業者数、従業者の山手、下町、郡部別居住地の分布割合、工賃、繁忙期、練習期間、材料費が紹介されている。

表7から、内職の種類によって、初心者の1人1か月工賃には大きな違いは見られないものの、熟練者になると最も高いもので30円、低いものだと6～8円となり、1か月で約20円ほどの差があることがわかる。熟練者の1人1か月工賃が比較的高い内職としては、裁縫、ミシン裁縫、輸出向刺繍、内地向刺繍、靴下の美術飾り、摘細工といった手芸内職に属するものが挙げられている。また表7からは、比較的工賃の高い内職の従業者の居住分布割合は、主に新中間層の居住地である山手の方が高いという傾向があると読み取れる。

表7 主な種類別内職一覧

種類	従業者数 (人)	居住地分布 (%)		工賃 (円) 年額	1人1カ月工賃 (円)	
		山手	下町		初心者	熟練者
裁縫	5,270	40	30	189,720	3	30
ミシン裁縫	1,830	40	30	65,760	2	25
輸出向刺繍	500	70	5	30,000	5	30
内地向刺繍	1,950	70	5	70,200	5	30
靴下の美術飾り	2,335	40	30	84,060	4	20
絞り	1,944	70	5	70,000	3	10
レース編物	1,944	70	5	70,000	2	10
毛糸編物	500	70	5	18,000	2	10
摘細工	560	70	5	20,160	4	20
紹刺	500	30	50	18,000	2	10
封筒	2,500	5	70	60,000	2	10
熨斗折	750	5	70	6,000	2	6
玩具	3,166	5	70	75,994	2	15
鼻緒	2,280	5	70	54,720	2	6
爪皮	1,240	5	70	29,760	2	8
合計	36,699			1,033,953		

永藤清子「明治大正期の副業と上流・中流家庭の家庭内職の検討」『甲子園短期大学紀要』第32巻（2014年3月）、2頁、「表1 主な種類別内職一覧」より引用

これらの点を踏まえると、新中間層の婦人たちが内職に従事する際には、どれだけの工賃を得ることができるのかということが重要な点の1つであったと考えることができる。本章第1節では、新中間層の婦人が内職に従事するようになった目的の1つに、収入を得るためということがあると明らかになっているが、このことも合わせると、実際に彼女たちが従事していた内職として、比較的高い工賃を得られる手芸内職が多く見られるのは自然なことだと言える。

2点目は、当時の女子教育において裁縫、手芸が重要視されていたということである。1872年に公布された学制では、男女共通教育が規定され、裁縫手芸等は特に重要視されていなかった。しかし女子の就学率は極めて低く、各地では「裁縫科があれば就学させる」という意識があったという<sup>61)</sup>。そのため1879年の教育令において、女子のために「裁縫科」が設けられるといったように、女子就学率の上昇させるための策として「手

芸」「裁縫」の教科導入が図られたことが明らかになっている<sup>62)</sup>。当時の女子教育では、良妻賢母の育成を目的とした良妻賢母主義教育が行われており、裁縫科は良妻賢母主義教育の具体化のための重要な科目の1つとされるようになっていった<sup>63)</sup>。

婦人雑誌に投稿された内職経験談では、数ある内職の中でも手芸内職を選んだ理由として、「元來私は編物は非常に好きですから、これならば樂々と出来るかと思つたから」<sup>64)</sup>や、「腕に覚えのある」<sup>65)</sup>ものが裁縫だった、といったことが挙げられている。これらの投稿は、投稿者が手芸内職に従事する以前にも、手芸の経験があったことを示している。

先行研究や、婦人雑誌の内職経験談の投稿から、新中間層の婦人において、内職に従事する以前の手芸の経験は、良妻賢母主義教育によってもたらされていたと言える。これらのことから、良妻賢母主義教育における手芸の経験によって、手芸内職に従事する新中間層の婦人がいたという可能性があることも考えられる。

### 第3節 内職従事による婦人の意識変化

本節では、内職に従事することによって、新中間層の婦人の意識にどのような変化があったのかという点について明らかにする。『婦人之友』1912年12月号の「婦人の職業に對する様々の経験（二）」では、内職従事による意識の変化について、次のような投稿が掲載されている。

これまで親や夫のお蔭で、何の不自由もなく暮して來た身は、お金の得がたいことも深く心づかなかつたので御座います。處が編物を始めましてからは、お金と云のふも（原文ママ）は實に容易く出来るものでないと云ふことがよく分り、この頃は獨りてにしまつな暮らしをするやうになりました<sup>66)</sup>

また、『婦人之友』1918年1月号の「成功のよろこび、失敗の教訓」においても、内職に従事したことで、意識の変化があったという婦人の投稿が見られる。

私も夫から月々の俸給を渡されても、以前にはそれ程にも思ひませんでした。自分で働いて見ると、夫の収入の難有きも一層分るやうになつて、おろそかに使ふことが出来なくなりました<sup>67)</sup>

以上に挙げた投稿からは、婦人が実際に内職に従事したことで、お金が容易には得ることができないものであるということを知ったために、「しまつな暮らし」をするようになったり、夫の収入をいい加減に使うことが無くなったりしていることが読み取れる。内職に従事したことで収入が増加したはずであるのに、かえって婦人の中で節約、儉約意識が高まり、その節約意識に基づいた行動がとられるようになっていっているのである。

#### 第4節 妻の内職従事に対する夫の姿勢

本章第1節で取り上げた投稿から、妻の内職従事に対して協力的な姿勢を示す夫の存在が明らかになったが、この投稿以外にも妻の内職従事に対する夫の姿勢がうかがえる投稿が見られたため、本節では、それらの投稿を取り上げて、妻の内職従事に対し、夫はどのような態度や姿勢を示したのかという点について探っていく。

『婦人之友』1912年12月号の「婦人の職業に對する様々の經驗（二）」では、内職を始めるか迷っていた婦人が、そのことを夫に相談したところ「それはよからう」という許しを得たことをきっかけとして内職を始めたという投稿が掲載されている<sup>68)</sup>。この投稿では、妻が内職に従事することに対し、夫が肯定的な姿勢を示していると言える。また、夫の許しを得たことをきっかけとして、妻が内職を始めたという点からは、妻側にも自分が内職に従事することで夫の沽券に関わる問題になるのではないかという意識があったと読み取れる。

本章第1節では、『婦人之友』1917年2月号「幸運と悪運は何處からめぐつて來たでせうか」という記事の、夫の収入だけでは一家を支えることが出来なかったため、麻糸つなぎの内職に従事するようになったという婦人の投稿を取り上げたが、この投稿にも妻の内職従事に対する夫の姿勢に関する記述が見られた。

『そんなことまでしなくても』と夫も始めは申しましたが『今の勤めが馬鹿々々しくて、いやな氣持で歸つて來ても、お前が麻糸つなぎをやつて居るのを見ると、また氣をとりなほすよ』と申しまして、夜など私がつなぎますと、手傳はうかと云つては巻いてくれたこともありました<sup>69)</sup>

投稿者の夫は、妻が内職に従事することに関して「そんなことまでしなくても」と否定的な姿勢を示していたものの、妻が内職を続けていくうちに、肯定的な姿勢を示すようになり、時には妻の内職を手伝うというように協力的な姿勢を示すようになっている。この投稿からは、妻の内職従事が、夫の意識の変化をもたらしていることがわかる。

第1章第2節では、婦人が内職に従事することは、都市部の新中間層の夫にとってプライドに関わる問題であったことが明らかになった。しかし妻に内職をさせることが恥だとする認識がある一方で、本節で取り上げた投稿からわかるように、妻の内職従事を肯定的に捉え、中には内職に協力までする夫が少なからず存在していたということは注目すべき点である。

## 終章

本稿の目的は、内職奨励に関する書籍や『婦人之友』『主婦之友』『婦人倶楽部』といった婦人雑誌から、大正期において内職を奨励していた立場と、実際に内職に従事していた新中間層の婦人という立場のそれぞれから内職の実態を明らかにすることであった。

内職を奨励する立場に焦点を当てたところ、①生活難解消のため、②国家の発展のためという2点の背景から内職を奨励していたことや、多種多様な内職を奨励していた中でも、対象を中流以上の婦人に限定すると、「上品」「婦人的」「美しい」というような要素を持ち、収入の多い手芸内職が主に奨励されていたということが明らかになった。また内職に従事することを恥だとする認識があることがわかったが、この認識には新中間層における性別役割分業意識が関係していると考えられる。

一方で、実際に内職に従事していた新中間層の婦人という立場に焦点を当てると、①収入を得るため、②暇な時間を活用するためという2点の目的から内職に従事していたことが明らかになった。この点に関して婦人雑誌の読者層の違いに着目したところ、社会階層と内職従事の目的には関係があることがうかがえた。また、新中間層の婦人が実際に従事していた内職の具体的な内容には様々なものが見られるが、その中でも特に手芸内職が多く見られており、この点については工賃と良妻賢母主義教育が関係していることが推測される。さらに、内職に従事したことで収入が増加したはずであるのに、かえって婦人の中で節約意識が高まり、その節約意識に基づいた行動がとられるようになっていたことや、妻の内職に協力的、肯定的な姿勢を示す夫が存在していたことも明らかになった。

内職を奨励した立場と内職に従事した立場における内職の実態を比較すると、奨励した立場においては、国家という存在を意識した記述が見られるのに対し、新中間層の婦人という立場においては、国家という存在が意識された投稿はなく、家庭を意識した投稿が多数見られるという違いがあり、立場によって、内職に対する意識に差異があることがわかる結果となった。

本稿では、内職を奨励する立場と内職に従事した立場のそれぞれに焦点を当て、内職奨励の背景や、内職従事の目的、また代表的な内職の具体的な内容といった側面から、大正期における内職の実態を明らかにした。しかし時代が下るにつれて、これらの点に変化が見られることが予想される。戦時期における内職奨励の背景に着目すると、1944年に発行された若山亀吉の『戦ふ日本の共同生活』では、「家庭の主婦たちが家事の時間を割いて、近隣協力して戦時のお役にたつやうな生産に従事することは、まことに戦時にふさはしい」<sup>70)</sup>というように戦時色が表れていることがわかる。そのため今後は、大正期以降における内職の実態を明らかにすることを課題としたい。



〔注〕

- 1) 寺出浩司「大正期における職員層生活の展開」、日本生活学会編『生活学 第七冊』、ドメス出版、1982年、36頁
- 2) 永藤清子「大正期における俸給生活者及び職工の家族取入」『甲子園短期大学紀要』第31巻（2013年3月）、10-11頁
- 3) 永藤清子「明治大正期の副業と上流・中流家庭の家庭内職の検討」『甲子園短期大学紀要』第32巻（2014年3月）、2-3頁
- 4) 同上、7頁
- 5) 木村涼子『〈主婦〉の誕生 婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館、2010年、50頁
- 6) 南博、社会心理研究所『昭和文化』勁草書房、1987年、219頁
- 7) 前田愛『近代読者の成立』筑摩書房、1989年、155頁
- 8) 岡満男『婦人雑誌ジャーナリズム』現代ジャーナリズム出版会、1981年、87-106頁
- 9) 堀江俊一「明治末期から大正初期の『近代的家族像』-婦人雑誌からみた「山の手生活」の研究」『日本民俗学』第186号（1991年5月）、54頁
- 10) 寺出、前掲論文、57頁
- 11) 1867-1949. 明治から昭和時代の教育者。1903年に女子商業学校（のちの嘉悦学園）を創設するなど、女子教育につくした。
- 12) 嘉悦孝子『貯金の出来る経済の取り方：附・上品な内職』実業之日本社、1917年、1頁
- 13) 1866-1933. 1891年、通信省に入ると、1910年に台湾総督府民政長官に転任するまで、主として海事行政に携わり、海運政策の確立に貢献した。1917年には、通信次官に任ぜられる。1918年の次官退任後は、貴族院議員に勅選され、また1923年から1924年まで台湾総督に任ぜられた。
- 14) 内田嘉吉『安全第一生活法』文豊社、1919年、16頁
- 15) 記者「上中流家庭にふさはしい婦人内職」『主婦之友』第4巻4号（1920年4月）、157頁
- 16) 同上、157頁
- 17) 一九二〇年代史研究会編『一九二〇年代の日本資本主義』東京大学出版会、1983年、332-333頁
- 18) 大島清『日本恐慌史論 下（第一次大戦後の恐慌）』東京大学出版会、1955年、2頁
- 19) 木下幹『婦人も働け』日本評論社出版部、1919年、5-6頁
- 20) 廣嶋清志「現代日本人口政策史小論：人口資質概念をめぐって（1916-1930年）」『人口問題研究』第154号（1980年4月）、50頁、山田唐波里「近代的統治戦略としての（均衡化）—「人口方程式」の編成と政策論への導入—」『社会学評論』第70巻2号（2019年10月）、131頁
- 21) 木下、前掲書、5頁
- 22) 永田幸久「第一次世界大戦後における戦後構想と外交展開：パリ講和会議における人種差別撤廃案を中心として」『中京大学大学院生化学研究論集』第23巻（2003年3月）、201頁
- 23) 木下、前掲書、5-6頁
- 24) 木下、前掲書、6頁
- 25) 東部通信局編『内職奨励ニ関スル事項』東部通信局、1915年、9-10頁
- 26) 嘉悦、前掲書、2頁
- 27) 1849-1925. 長崎で蘭学を学び、1872年ドイツに留学して法律、経済などを修める。法制局局長などを経て行政裁判所長官となった。1891年には貴族院議員に勅選される。1903年、山脇女子実修学校（のちの山脇学園）を創設する。妻は明治から昭和期の女子教育家である山脇房子。
- 28) 山脇玄『家庭経済講話』東盛堂、1919年、1頁
- 29) 記者「東京にある有利確実な婦人向内職案内」『婦人倶楽部』第6巻3号（1925年3月）、106-107頁
- 30) 主婦之友調査部「確実な婦人の内職と収入案内」『主婦之友』第9巻5号（1925年5月）、204頁
- 31) 落合恵美子『21世紀家族へ』有斐閣、1997年、103頁
- 32) 嘉悦、前掲書、241頁
- 33) 山脇、前掲書、21頁
- 34) 安田操一『貯金の秘訣』東亜堂書房、1915年、245頁
- 35) 1840-1926. 1875年に跡見女学校（のちの跡見学園女子大学）を開いた。1919年まで同校校長を務め、伝統主義的教養の形成に力を注いだ。
- 36) 跡見花蹊『をりをり草』実業之日本社、1915年、120頁
- 37) 木下、前掲書、10頁
- 38) 内職のこと
- 39) 東部通信局編、前掲書、8頁
- 40) 安田、前掲書、242-243頁
- 41) 嘉悦、前掲書、238頁
- 42) 山脇、前掲書、20頁
- 43) 小林書店編『家事経済良妻』小林書店、1919年、189頁

- 45) 内田、前掲書、217頁
- 46) 東部通信局編『内職奨励ニ関スル事項』の説明によると、麻糸の不良部分を切り取り、糸をつないでいく内職のこと
- 47) 「幸運と悪運は何處からめぐつて来たでせうか」『婦人之友』第11巻2号（1917年2月）、58-60頁
- 48) 「各種副業内職の實驗談」『婦人倶楽部』第4巻7号（1923年7月）、134頁
- 49) 「内職で生活する人の経験」『主婦之友』第7巻7号（1923年7月）、68-69頁
- 50) 「内職で生活する人の経験」『主婦之友』第7巻7号（1923年7月）、70-71頁
- 51) 「内職に成功した人々の實驗」『主婦之友』第8巻6号（1924年6月）、88頁
- 52) 沢山美果子「教育家族の成立」、第1巻編集委員会編『〈教育〉—誕生と終焉』、藤原書店、1990年、108頁
- 53) 沢山美果子『男と女の過去と未来』世界思想社、2000年、119頁
- 54) 「内職副業に成功したる實驗」『主婦之友』第6巻14号（1922年12月号）、170頁
- 55) 「婦人の職業に對する様々の經驗（二）」『婦人之友』第6巻12号（1912年12月）、73頁
- 56) 「私の内職」『婦人之友』第17巻2号（1923年2月）、153-154頁
- 57) 「内職に成功した人々の實驗」『主婦之友』第8巻6号（1924年6月）、90頁
- 58) 大和俊子「ひまな主婦の内職會」『婦人之友』第11巻4号（1917年4月）、62頁
- 59) 同上、64頁
- 60) 「かうして私は職業を得ました」『婦人之友』第12巻3号（1918年3月）、39-40頁
- 61) 深谷昌志「日本女子教育史」、世界教育史研究会編『世界教育史体系34』、講談社、1977年、260-263頁
- 62) 山崎明子『近代日本の「手芸」とジェンダー』世織書房、2005年、238頁
- 63) 永野みどり「家事科・裁縫科の諸問題にみる女子教育：明治から昭和初期にかけて」『筑波社会科研究』第7号（1988年2月）、42頁
- 64) 「婦人の職業に對する様々の經驗（二）」『婦人之友』第6巻12号（1912年12月）、73頁
- 65) 大和俊子「ひまな主婦の内職會」『婦人之友』第11巻4号（1917年4月）、62頁
- 66) 「婦人の職業に對する様々の經驗（二）」『婦人之友』第6巻12号（1912年12月）、73頁
- 67) 「成功のよろこび、失敗の教訓」『婦人之友』第12巻1号（1918年1月）、98頁
- 68) 「婦人の職業に對する様々の經驗（二）」『婦人之友』第6巻12号（1912年12月）、72-74頁
- 69) 「幸運と悪運は何處からめぐつて来たでせうか」『婦人之友』第11巻2号（1917年2月）、59-60頁
- 70) 若山亀吉『戦ふ日本の共同生活』文松堂出版、1944年、228頁

## 文献リスト

- ・ 跡見花蹊『をりをり草』実業之日本社、1915年
- ・ 内田嘉吉『安全第一生活法』文豊社、1919年
- ・ 永藤清子「大正期における俸給生活者及び職工の家族収入」『甲子園短期大学紀要』第31巻（2013年3月）、9-15頁
- ・ 永藤清子「明治大正期の副業と上流・中流家庭の家庭内職の検討」『甲子園短期大学紀要』第32巻（2014年3月）、1-8頁
- ・ 大島清『日本恐慌史論 下（第一次大戦後の恐慌）』東京大学出版会、1955年
- ・ 岡満男『婦人雑誌ジャーナリズム』現代ジャーナリズム出版会、1981年
- ・ 落合恵美子『21世紀家族へ』有斐閣、1997年
- ・ 嘉悦孝子『現在の生活費から思はぬ貯金を産み出す法』春秋社書店、1916年
- ・ 嘉悦孝子『貯金の出来る經濟の取り方：附・上品な内職』実業之日本社、1917年
- ・ 木下幹『婦人も働け』日本評論社出版部、1919年
- ・ 木村涼子『〈主婦〉の誕生 婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館、2010年
- ・ 小林書店編『家事經濟良妻』小林書店、1919年
- ・ 沢山美果子「教育家族の成立」、第1巻編集委員会編『〈教育〉—誕生と終焉』、藤原書店、1990年、108-131頁
- ・ 沢山美果子『男と女の過去と未来』世界思想社、2000年
- ・ 一九二〇年代史研究会編『一九二〇年代の日本資本主義』東京大学出版会、1983年
- ・ 大日本家政学会編『新説処世大鑑』大日本家政学会、1913年
- ・ 高村光徳『貯金の出来る簡易生活法』大盛堂書店、1925年
- ・ 寺出浩司「大正期における職員層生活の展開」、日本生活学会編『生活学 第七冊』、ドメス出版、1982年、34-74頁

- ・ 東京市社会局編『内職に関する調査』東京市社会局、1921年
- ・ 東部通信局編『内職奨励ニ関スル事項』東部通信局、1915年
- ・ 永田幸久「第一次世界大戦後における戦後構想と外交展開：パリ講和会議における人種差別撤廃案を中心として」『中京大学大学院生化学研究論集』第23巻（2003年3月）、157-256頁
- ・ 永野みどり「家事科・裁縫科の諸問題にみる女子教育：明治から昭和初期にかけて」『筑波社会科学研究』第7号（1988年2月）、42-52頁
- ・ 日本職業調査会編『女が自活するには』周文堂、1923年
- ・ 農商務大臣官房統計課編『大正十年物價表』農商務大臣官房統計課、1922年
- ・ 廣嶋清志「現代日本人口政策史小論：人口資質概念をめぐって（1916-1930年）」『人口問題研究』第154号（1980年4月）、46-61頁
- ・ 深谷昌志「日本女子教育史」、世界教育史研究会編『世界教育史体系34』、講談社、1977年、201-330頁
- ・ 堀江俊一「明治末期から大正初期の「近代的家族像」—婦人雑誌からみた「山の手生活」の研究」『日本民俗学』第186号（1991年5月）、39-73頁
- ・ 前田愛『近代読者の成立』筑摩書房、1989年
- ・ 南博、社会心理研究所『昭和文庫』勁草書房、1987年
- ・ 安田操一『貯金の秘訣』東亜堂書房、1915年
- ・ 山崎明子『近代日本の「手芸」とジェンダー』世織書房、2005年
- ・ 山田唐波里「近代的統治戦略としての〈均衡化〉—「人口方程式」の編成と政策論への導入—」『社会学評論』第70巻2号（2019年10月）、128-145頁
- ・ 山脇玄『家庭経済講話』東盛堂、1919年
- ・ 若山亀吉『戦ふ日本の共同生活』文松堂出版、1944年

#### 雑誌記事

- ・ 愛子「子供の守をしながらでも出来る有利な足袋の内職」『主婦之友』第4巻3号（1920年3月）、137頁
- ・ 秋子「一週間の稽古で月三十圓取れる焼繪内職」『主婦之友』第2巻11号（1918年11月）、108-109頁
- ・ 一記者「東京にある有利確実な婦人向内職案内」『婦人倶楽部』第6巻3号（1925年3月）、104-113頁
- ・ 記者「上品で利益の多い家庭の新内職」『主婦之友』第12巻7号（1918年7月）、70-78頁
- ・ 記者「中流家庭の理想的内職案内（新京鹿の子紋）」『主婦之友』第3巻1号（1919年1月）、74-76頁
- ・ 記者「新京鹿の子紋の内職とその紋方」『主婦之友』第3巻3号（1919年3月）、114-118頁
- ・ 記者「上品で収入の多い靴下の飾刺繍（内職案内）」『主婦之友』第3巻11号（1919年11月）、51-53頁
- ・ 記者「趣味があつて収入の多い半襟刺繍（内職案内）」『主婦之友』第3巻12号（1919年12月）、116-117頁
- ・ 記者「上中流家庭にふさはしい婦人内職」『主婦之友』第4巻4号（1920年4月）、157-159頁
- ・ 記者「唯一の有望な内職としての新京鹿の子紋」『主婦之友』第5巻4号（1921年4月）、116-118頁
- ・ 記者「中流向内職として靴下刺繍の復活」『主婦之友』第6巻6号（1922年4月）、175頁
- ・ 小谷武治「婦人の内職としての養蜂」『婦人之友』第7巻11号（1913年11月）、72-78頁
- ・ 主婦之友調査部「確実な婦人の内職と収入案内」『主婦之友』第9巻5号（1925年5月）、204-208頁
- ・ 本誌記者「有望になつた毛絲編物内職案内」『主婦之友』第7巻11号（1923年11月）、226頁
- ・ 三谷たけ子「上品で収入の多い靴下の飾刺繍の内職」『主婦之友』第2巻12号（1918年12月）、92-95頁
- ・ 山田菊水「内職としてのミシン刺繍」『婦人之友』第8巻12号（1914年12月）、122-126頁
- ・ 大和俊子「ひまな主婦の内職會」『婦人之友』第11巻4号（1917年4月）、62-64頁
- ・ 「婦人の職業對する様々の經驗」『婦人之友』第6巻11号（1912年11月）、63-90頁
- ・ 「婦人の職業に對する様々の經驗（二）」『婦人之友』第6巻12号（1912年12月）、67-88頁
- ・ 「幸運と悪運は何處からめぐつて來たでせうか」『婦人之友』第11巻2号（1917年2月）、33-79頁
- ・ 「上品で利益の多い内職の經驗」『主婦之友』第1巻5号（1917年7月）、63-75頁
- ・ 「妻の働きで収入を殖した經驗」『主婦之友』第1巻10号（1917年12月）、49-59頁
- ・ 「成功のよろこび、失敗の教訓」『婦人之友』第12巻1号（1918年1月）、89-99頁
- ・ 「かうして私は職業を得ました」『婦人之友』第12巻3号（1918年3月）、39-57頁
- ・ 「成功した内職と副業の經驗」『主婦之友』第2巻11号（1918年9月）、38-55頁
- ・ 「今年に於ける生活を顧みて」『婦人之友』第12巻12号（1918年12月）、39-58頁
- ・ 「内職に成功した經驗」『主婦之友』第3巻7号（1919年7月）、42-51頁

- ・「家事の傍ら従事する中流主婦の内職実験」『主婦之友』第3巻9号（1919年9月）、60-65頁
- ・「私の職業に従事してゐる譯—従事しない譯」『婦人之友』第14巻6号（1920年6月）、40-67頁
- ・「内職副業に成功したる実験」『主婦之友』第6巻14号（1922年12月号）、170-176頁
- ・「私の内職」『婦人之友』第17巻2号（1923年2月）、152-155頁
- ・「私の内職」『婦人之友』第17巻4号（1923年4月）、94-96頁
- ・「内職で生活する人の経験」『主婦之友』第7巻7号（1923年7月）、68-72頁
- ・「各種副業内職の実験談」『婦人倶楽部』第4巻7号（1923年7月）、134-141頁
- ・「内職に成功した人々の実験」『主婦之友』第8巻6号（1924年6月）、88-92頁
- ・「内職による我が家の貯金法」『婦人倶楽部』第6巻10号（1925年10月）、214-217頁

(Y氏賞受賞作品)